

Red Hat OpenStack Services on OpenShift サブスクリプション

Red Hat OpenStack Services on OpenShift 製品

この概要では、Red Hat® OpenStack® Services on OpenShift® サブスクリプションのオプションについてご説明します。これによりお客様は組織にとって最適なソリューションを選択できます。Red Hat のアカウント担当者は、お客様が自社の選択肢を理解して、技術要件とビジネス要件を満たすための適切な決定を下すお手伝いをします。

Red Hat OpenStack Services on OpenShift サブスクリプションには 2 種類あります。

1. Red Hat OpenStack Services on OpenShift (Premium)
2. Red Hat OpenStack Services on OpenShift (Standard)

Red Hat OpenStack Services on OpenShift : OpenShift クラスタのホスティング使用制限

- ▶ Red Hat OpenStack Services on OpenShift のデプロイメントでは、2 種類の高可用性 (HA) クラスタバリエーションがサポートされています。
- ▶ 3 ノード OpenShift ベアメタルクラスタ (マスター/ワーカーコンボ)
- ▶ マルチノード OpenShift ベアメタルクラスタ (専用マスター + 専用ワーカー + インフラストラクチャ・ノード)
- ▶ インフラストラクチャ・ノードとマスターノードは OpenShift サポートポリシーに従い、Red Hat OpenStack Services on the OpenShift のコントロールプレーンは必要な OpenShift ワーカーノードを 1:1 の比率でカバーします。つまり、Red Hat OpenStack Services on OpenShift コントロールプレーン 1 つで OpenShift ワーカーノード 1 つ、サブスクリプション権 1 つをカバーします。
- ▶ Red Hat OpenStack Services on OpenShift コントロールプレーン・サブスクリプションでは、Red Hat 製品のデプロイのみが許可されています。以下に例を示します。
- ▶ [Red Hat Advanced Cluster Management for Kubernetes](#)、[Red Hat Advanced Cluster Security for Kubernetes](#)、[Red Hat Quay](#)、SSO、[Red Hat OpenShift Data Foundation](#)、LVMS、GitOps、およびその他の Red Hat インフラストラクチャベースの Operator は、必要なサブスクリプションが適用されていれば、サブスクライブされた OpenShift クラスタ上で実行できます。
- ▶ IPA/LDAP、DNS、およびその他のインフラストラクチャ関連サービスに使用される OpenShift Virtualization および Red Hat Enterprise Linux® ベースの仮想マシン (VM) は、必要なサブスクリプションが適用されていれば、サブスクライブされた OpenShift クラスタ上で実行できます。
- ▶ サードパーティ製または自社製のコンテナ化ワークロードや VM ワークロードを含めるには、該当するワークロード用のワーカーノードを追加するために追加の OpenShift サブスクリプションを購入すれば、OpenShift クラスタの機能を拡張することができます。

Red Hat OpenStack Services on OpenShift

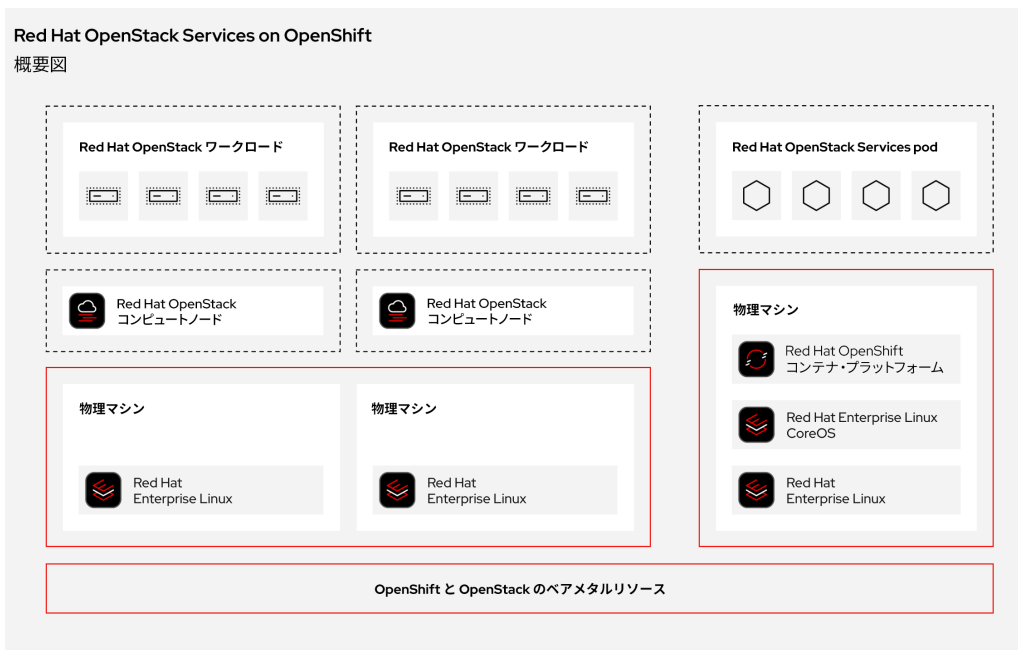
Red Hat OpenStack Services on OpenShift サブスクリプションの必要性を判断する

Red Hat OpenStack Services on OpenShift のインストールまたは実行に使用されるサーバー、または Red Hat OpenStack Services on OpenShift によって管理されるサーバーには、[Red Hat のエンタープライズ契約の付録 1](#) に従って、Red Hat OpenStack Services on OpenShift サブスクリプションが必要です。

Red Hat OpenStack Services on OpenShift サブスクリプションでは、最大 2 つの実装済みソケットを持つ 1 台のサーバーに付属のソフトウェアをインストールして実行できます。サーバーに 3 つ以上のソケットがある場合、許可されるソケット数がサーバーのソケット数と同じかそれ以上になるまで、追加のサブスクリプションをサーバーにスタックできます。

必要な Red Hat OpenStack Services on OpenShift サブスクリプション

ユースケース	必要なサブスクリプション
Red Hat OpenStack Services on OpenShift コントロールプレーン・ノード	サブスクリプション 1 つ
Red Hat Enterprise Linux ゲストを使用しないデータプレーン	サブスクリプション 1 つ
Red Hat Enterprise Linux ゲストを使用したデータプレーン	サブスクリプション 1 つ
既存の OpenShift Container Platform 上のコントローラー	サブスクリプション 2 つ
サービスとしてのベアメタル	サブスクリプション 1 つ





Red Hat OpenStack Services on OpenShift

OpenStack Operator

OpenStack Operator は、Red Hat Operator カタログの一部であり、Red Hat OpenStack Services on OpenShift デプロイメントのインストーラーおよびライフサイクル・マネージャーとして機能します。すべての OpenStack サービスのデプロイを担当し、各サービスは Red Hat がサポートする独自の operator-controller によって管理されます。デプロイと Day 2 オペレーション (パッチ適用、スケールアップおよびスケールダウン、アップグレード) は、CR yaml ファイル (Kubernetes CustomResource) で設定します。

Red Hat OpenStack Services on OpenShift コントロールプレーン

コントロールプレーンは、指定された OpenShift ワーカーノード上で pod として実行される OpenShift クラスタです。たとえば、Nova はクラスタ内の OpenShift ワーカーノード上で高可用性セットアップの複数の pod として実行され、それぞれの nova-operator-controller (上記のセクションで既述) によって管理されます。

OpenStack Services on OpenShift コントロールプレーンは主に永続ストレージを提供するため、Red Hat OpenStack Services on OpenShift コントロールプレーンには、Kubernetes ストレージクラスを介して公開される永続ストレージレイヤーが必要です。そのため、OpenStack Services on OpenShift コントロールプレーンをホストする OpenShift クラスタが機能するには、ローカル/SAN/ネットワーク・アタッチト・ストレージが公開されている必要があります。

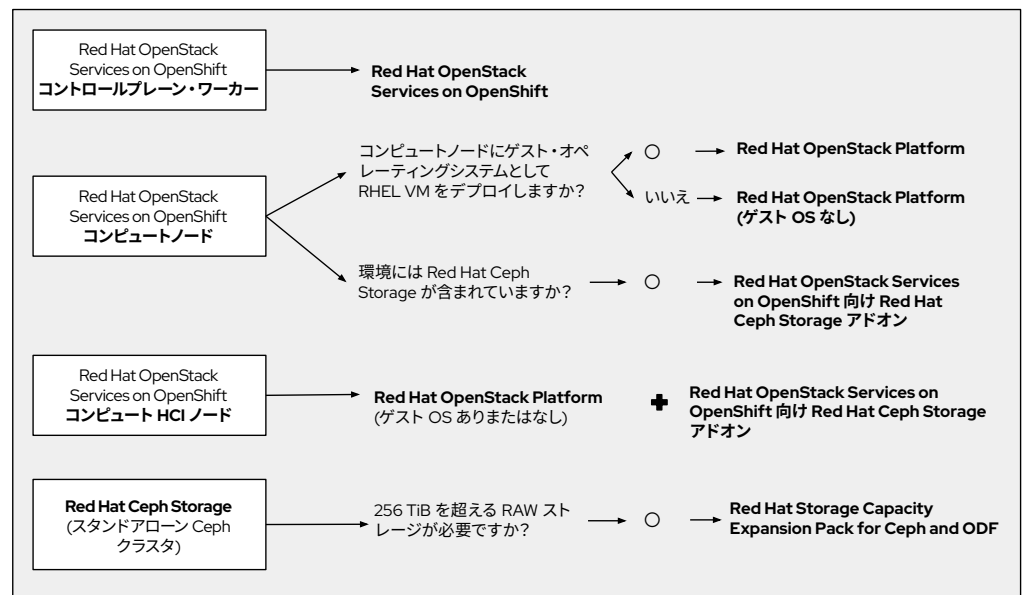
Red Hat OpenStack Services on OpenShift 外部データプレーン・コンピュート・ノード

Red Hat OpenStack Services on OpenShift コンピュートノードは、OpenStack Services on OpenShift 環境のデプロイ、実行、管理に使用される OpenShift クラスタの完全に外側にあります。コンピュートノードは、OpenStack Services on OpenShift クラスタに配置された Operator のグループによって管理されます。OpenStack コンピュートノードは kubelet サービスによって管理されるのではなく、Ansible® 構成によって管理され、OpenStack Services on OpenShift コントロールプレーンのデータプレーン Operator によって実行されます。

サブスクリプションの意思決定ツリー

Red Hat OpenStack Services on OpenShift ベースのクラウド環境でサーバーが持つ 4 つの役割を紹介しましたが、この意思決定ツリーで各サーバーにどのサブスクリプションを購入すべきかを判断できます。

Red Hat OpenStack Services on OpenShift



Red Hat Ceph Storage

Red Hat OpenStack Services on OpenShift から、Red Hat OpenStack Services on OpenShift 向け Red Hat Ceph Storage アドオンという、新しい Ceph® ベース製品のアドオンが提供されます。

このベース製品の測定ユニット (UoM) は、OpenStack のコンピュートソケットとなります。OpenStack Services on OpenShift の導入に伴い、Ceph クラスターに接続する OpenStack コンピュートノード・サブスクリプション (2 ソケット) ごとに Red Hat Ceph Storage アドオン・サブスクリプションが必要になります。

各 Ceph クラスターには、Ceph ベース製品によって提供される 256 TiB の RAW 容量があります。複数の OpenStack Services on OpenShift クラスターが同じ 1 つの Ceph クラスターに接続されている場合、すべての OpenStack コンピュートノードと、すべての OpenStack Services on OpenShift クラスターからの合計ストレージ容量要件をカウントする必要があります。

サブスクリプションには、Standard サポートと Premium サポートがあります。サポートレベルは、OpenStack Services on OpenShift で購入したものと一致する必要があります。

256 TiB を超える容量が必要な場合は、容量拡張パックを購入することができます。

新しい Ceph アドオン容量拡張パックの構成と価格は、既存の OpenShift Data Foundation 容量拡張パックと同じです。既存の OpenShift Data Foundation 容量拡張パックは再利用され、Red Hat Storage Capacity Expansion Pack for Ceph and OpenShift Data Foundation に名称が変更されます。

引き続き 256 TiB、512 TiB、1、2、3、4、5、10 PiB が利用可能です。Red Hat Storage Capacity Expansion Pack for Ceph and OpenShift Data Foundation は、古い Ceph サブスクリプションでは使用できません。



Red Hat OpenStack Services on OpenShift

概要

OpenStack Services on OpenShift 向けの新しい Red Hat Ceph Storage アドオンは、OpenShift Data Foundation を通じて OpenShift クラスタを外部の Ceph クラスタに接続するために必要なサブスクリプションも付与します。

この価格設定は OpenStack Services on OpenShift から適用され、Red Hat OpenStack Platform 17.1 プラットフォームでは以前の容量ベースの Ceph 価格が引き続き使用されます。すでに旧 Ceph Storage を購入された既存のお客様は、引き続き更新できます。

ハイパーコンバージド・インフラストラクチャ

Red Hat OpenStack Services on OpenShift はハイパーコンバージド・インフラストラクチャ (HCI) をサポートします。Ceph Storage サービスは OpenStack コンピュートと同じノードに配置されます。

新しい Ceph Storage サブスクリプションの仕組みは、HCI でも変わりません。ノードがハイパーコンバージドであるかどうかに関係なく、1 つのコンピュートノードにつき 1 つの Ceph Storage アドオンを購入する必要があります。

Smart Management オプション

Red Hat OpenStack Services on OpenShift と Red Hat OpenStack Services on OpenShift (ゲスト OS なし) の両方に、Smart Management を含むオプションのサブスクリプションがあります。

- ▶ Smart Management を備えた Red Hat OpenStack Services on OpenShift
- ▶ Smart Management を備えた Red Hat OpenStack Services on OpenShift (ゲスト OS なし)
- ▶ どちらの Smart Management サブスクリプションでも、サブスクリプションに含まれる Red Hat ソフトウェアのライフサイクル管理ツールとして Red Hat Satellite Server を使用できます。

[Red Hat Smart Management](#) の詳細はこちらからご覧ください。

ライフサイクルオプション

組織の Red Hat OpenStack Services on OpenShift をアップグレードする頻度を決定する際には、多くの要素を考慮する必要があります。どのオプションがお客様の組織に適しているかについては、Red Hat のアカウント担当者にご相談ください。

[Red Hat OpenStack Services on OpenShift](#) のライフサイクルの詳細はこちらからご覧ください。



Red Hat について

Red Hat は、[受賞歴のある](#)サポート、トレーニング、コンサルティング・サービスをお客様に提供し、複数の環境にわたる標準化、クラウドネイティブ・アプリケーションの開発、複雑な環境の統合、自動化、セキュリティ保護、運用管理を支援します。

f fb.com/RedHatJapan
X twitter.com/RedHatJapan
in linkedin.com/company/red-hat

jp.redhat.com
#1567143_1224

アジア太平洋 +65 6490 4200 apac@redhat.com	インドネシア 001 803 440 224	マレーシア 1 800 812 678	中国 800 810 2100
オーストラリア 1 800 733 428	日本 03 4590 7472	ニュージーランド 0800 450 503	香港 800 901 222
インド +91 22 3987 8888	韓国 080 708 0880	シンガポール 800 448 1430	台湾 0800 666 052

Copyright © 2024 Red Hat, Inc. Red Hat, Red Hat ロゴ、OpenShift、Ansible、および Ceph は、米国およびその他の国における Red Hat, Inc. またはその子会社の商標または登録商標です。Linux® は、米国およびその他の国における Linus Torvalds 氏の登録商標です。OPENSTACK のロゴおよびワードマークは OpenInfra Foundation の商標または登録商標であり、ライセンスに基づいて使用されています。